英語動詞 take の構文パターンと文法役割に関する事例研究*

── *Harry Potter and the Philosopher's Stone* から ──

横　村　栄　美

1　はじめに

本稿では英語の基本動詞 take について，統語関係，特に構文パターンと文法役割の観点から事例研究を行い，動詞 take と構文パターンの関係について考察する。動詞 take は Norvig and Lakoff (1987) でも分析されているように，様々な意味を持ち，多くの構文パターンと結びつく。また，構文パターンを構成する文法役割を担う名詞の種類も多岐に渡り，動詞 take が多義語といわれる多くの要素がある。

ここでは，イギリスの小説 *Harry Potter and the Philosopher's Stone* を使い，約 160 の例文を分析し，以下の点を指摘する。

・Norvig and Lakoff で分析されている 7 つの用法の分類は take の結びつく構文パターン全てを扱ってはおらず，7 つの用法の頻度に関して不明であり，用法の選択基準，分類基準が曖昧である。

・動詞 take は SVO[1] の形を最も多くとり，基本として「人が人やものを移動させる」という意味を持っている。この SVO という構文パターンは，辞書[2]

---

* この論文を書くにあたり，多くの有益なコメントをくださった北海道大学大学院文学研究科の高橋英光先生と友人の眞田敬介氏に深くお礼を申し上げます。

[1] 本稿で用いる省略記号は以下の通りである：S subject（主語）；V verb（動詞）；O object（目的語）；Vpp verb past particle（動詞の過去分詞）。

[2] 本稿では，データ分析にあたり，いくつかの辞書で意味や熟語について調べた。参考辞書は以下の通りである：『コウビルド英英辞典　第 3 版』(2001) Harper

の take の項目で一番最初に出てくるものではない。また，take の意味について述べている Norvig and Lakoff では，この構文パターンは意味ネットワークに含まれていない。

・動詞 take は SVO の構文パターンを最も多くとるが，その後ろに前置詞句や副詞句が続くものや，take と目的語が結びついて熟語として機能しているものなども多い。

・文法役割については，主語としては人といった，目的語句を移動したり自らが移動したりするものが多く，目的語としては人や物体などの，移動可能なものが多い。

本稿は，2 節で先行研究 Norvig and Lakoff についての概略を述べ，問題点を指摘する。3 節ではデータについて，4 節ではデータの分析結果について述べる。5 節ではまとめと今後の課題について述べる。

2　先行研究：Norvig and Lakoff (1987)

動詞 take が持つたくさんの意味を，意味のネットワークとして示した研究に，Norvig and Lakoff (1987) がある。Norvig and Lakoff は，動詞 take の結びつく構文パターンについて，基本的意味を「動作主が被動作主を出発点から目的地へ移動させる（結果，動作主は被動作主をとる）」とし，意味役割（動作主〈agent〉，被動作主〈patient〉，起点〈source〉，受領者〈recipient〉，道具〈instrument〉，出発点〈origin〉，目的地〈destination〉）をもとに分析を行い，以下の 7 つの構文パターンの意味ネットワークを示している。

Collins Publishers,『ロングマン英和辞典　第 1 版』(2007) ピアソン・エデュケーション,『ジーニアス英和辞典　第 4 版』(2006) 大修館書店,『リーダーズ英和辞典　第 2 版』(1999) 研究社。

(1)

a．John took the book from Mary.　［Take-1］
b．John took the book to Mary.　［Take-2］
c．John took the book to Chicago.　［Take-3］
d．John took Mary to the theater.　［Take-4］
e．John took a whiff of the coffee.　［Take-5］
f．John took a punch at Harry.　［Take-6］
g．John took a punch from Harry.　［Take-7］

Norvig and Lakoff では，（1 a）を中心的意味（プロトタイプ的意味）とし，意味役割の変化による統語上の変異をネットワークという観点から説明している。Take-1 から Take-2 へは意味役割の違いによる意味の変化，Take-2 と Take-3 は to 以下の意味役割の違い，Take-4 は Go-to-schema の発生による変化，Take-5 は Take-1 の隠喩的拡張，Take-6 と Take-7 は Take-2 からの変化で，前置詞句の違いによる場面の違いとして，それぞれが基本的意味からの意味拡張による意味ネットワークを示していると述べている。

この研究は，多義語の意味を全て関連があるものと考え，意味ネットワークを示しているという点では有意義なものである。しかし，take が結びつく構文パターンはもっと多く，どういった基準でこれら 7 つの意味が選択されたのかや，これら選択された用法の頻度などは不明である。また，実際の使用例はこれらのように意味役割が明示できるものとは限らない。受け身や不定詞，分詞構文パターンなどでも使用される場合，どのように意味を定義するかなど，残された問題が多くある。

これらの問題のうち，小説による事例研究を通して，動詞 take の，最も使用例の多い構文パターンは何か，主語や目的語といった文法役割に結びつきやすい名詞句の種類は何か，について，次節から検討していく。

3 データ

事例研究の題材は J.K. Rowling の *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997) である。広く読まれている小説であること，英語が平坦で，専門的な表現等がないこと，登場人物が年齢の幅も含めて複数おり，場面も家庭や学校など様々であり，多くの事例を集められると考えられることが選定の理由である。

4 分析

ここでは動詞 take を含む文を全て抜き出して分析することとした。集めた例文は 161 例である。分類の基準は，まず，動詞 take に後続する目的語の有無(SVO/SV)，次に，前置詞句の有無，副詞句の有無である。受け身はそのまま受け身として数えることとした。目的語については，動詞のすぐ後ろにある名詞は全て目的語とした。Thompson and Hopper (2001) でも言及されているが，目的語，特に，熟語とされる VO 複合句は判断基準が曖昧である。ここでは，たとえば「take place」「take a nap」のような，辞書では熟語と扱われているものも，「place」「a nap」は名詞であるため，目的語として数えた。また，句動詞（動詞の後ろに前置詞句／副詞句がある場合）の，前置詞／副詞句のすぐ後ろの名詞は目的語として数えた。

分析に際し，命令文，関係詞節，不定詞句，分詞構文パターンなどの例文で，構文パターンが推測可能なものに関しては，文脈から適切な主語，目的語等を補って分類することとした。たとえば，“Harry left the changing room alone some time later, to take his Nimbus Two Thousand back to the broomshed.”（Harry Potter, p.243-109[3]）では，take は不定詞句にある

[3] 以下，例文の後ろの括弧は Harry Potter のページと例文の通し番号を示す。たとえば，(p.243-109) は，243 ページにある例文で，動詞 take の 109 番目の文であることを示している。

が，主節の主語 Harry が不定詞句以下の行為を遂行すると考えることができるため，主語を補い，「S take O前置詞句」に分類する。

4.1　構文パターンについて

4.1.1　take が結びつく構文パターンについて

今回，データを分析した中で動詞 take がとる構文パターンは以下の表 1 の通りである。

表 1　動詞 take の結びつく構文パターン

構文パターン	数	割合(%)[4]
SVO	55	34.2
SV（＝複合動詞句）O	17	10.6
SVO　前置詞句（＋名詞句あり）	42	26.1
SVO　前置詞句（＋名詞句なし）	5	3.1
SVO　副詞句	11	6.8
SVO to V	6	3.7
SVO for 句 to V	2	1.2
SV（＝複合動詞句）（名詞句なし）	6	3.8
SV to V	1	0.6
SV[5]	1	0.6
S be Vpp	15	0.9
計	161	100

以下でそれぞれの構文パターンについて例を示しながら述べていく。

---

[4] 本稿ではすべて，割合については小数点第 2 位以下四捨五入して算出している。

[5] S take という構文パターンについては，例文が詩的な表現であり，1 例しか見られなかった。この文には目的語等を補う必要があるかもしれないが，文脈から判断することができないので，ここでは表に提示するのみとする。今後，もっとデータを集めて検討する必要がある。

4.1.2　SVO

4.1.2.1　SVO

動詞 take が結びついている，最も多い例文の構文パターンは SVO で，55 例であった。これは Norvig and Lakoff では言及されていない構文パターンであり，辞書の記述においても最初に掲載されているものではない。具体的な意味としては，目的語（O）が物体の場合は「取る」「取り出す」，人の場合は「連れ出す」「連れて行く」，行為の場合は「その行為を行う」などである。行為については，55 例中 14 例見られ，「take one look　一瞥する」，「take a swipe　非難する，打つ」，「take care　注意を払う」，「take heed　心にとどめる」などがあった。この構文パターンには，目的語がどこから来たのか，どこへ行くのかなどは明記されておらず，先行文脈に明記されている場合と全く書かれていない場合とがある。

(2)　SVO

a．Harry took the wand. (p.96-40)

b．Harry grouped for the doorknob - between Filch and death, he'd take Filch. (p.176-81)

c．Harry took a deep breath and picked up the smallest bottle. (p. 309-148)

（2 a）は主語である Harry が杖（the wand）を取り出すこと，（2 b）では主語 he が Filch を連れて行くこと，（2 c）は主語 Harry が深呼吸する（a deep breath）することを示している。どれも，目的語がどこから来たものか，どこへ行くのかについては文に明記されていない。

4.1.2.2　SV（＝複合動詞句）O

SVO のうち，動詞が複合動詞句となっているものが 17 例あった。これは，take の後ろにすぐに前置詞句や副詞句があるような文であり，熟語として辞

書に載っていることが多い。今回の分析で，動詞 take に続くものはすべて副詞だった。副詞は頻度順に，out（7 例），off（5 例），on（3 例），down（1 例），up（1 例）であった。副詞の後に名詞句（目的語句）がある場合（17 例）とない場合（6 例）とがあり，名詞句がない場合，明記されてはいないが文脈の状況から推測出来る場合と，先行文脈に相当語句がある場合，また，動詞句が自動詞的な意味を持っている場合とがある（名詞句のない SV（＝複合動詞句）については 4.1.3 節で扱う）。

(3)　SV 複合動詞句 O

a．On the corner he stopped and took out the silver Put-Outer. (p.23-6)

b．He took off his thick black coat and threw it to Harry. (p.70-31)

c．Their mother had just taken on her handkerchief. (p.106-45)

（3 a）は銀色のライター（the silver Put-Outer）を取り出す動作を，（3 b）はコートを脱ぐ動作を，（3 c）はハンカチを取り出すことを，それぞれ示している。

4.1.2.3　SVO 前置詞句

SVO 前置詞句という構文パターンが 47 例あった。前置詞は，頻度順に，from（10 例），to（7 例），in（5 例），off（5 例），down to（3 例），out of（3 例），towards（3 例），back to（3 例），on（2 例），out（2 例），by（1 例），through（1 例），underneath（1 例），up to（1 例）であった。この構文パターンは，前置詞句の後ろに名詞句がある場合（42 例）は，その名詞句が O の所在を示している。前置詞句の後ろに名詞句がない場合（5 例）は，take と前置詞句で熟語となり，自動詞的な意味を持っている。

(4) SVO 前置詞句

a. '… I'll take another fifty points from Gryffindor! …' (p.291-130)

b. One day in July, Aunt Petunia took Dudley to London to buy his Smeltings uniform, leaving Harry at Mrs Figg's. (p.40-14)

c. A bundle of walking sticks was floating in midair ahead of them and as Percy took a step towards them they started throwing themselves at him. (p.141-64)

d. He passed the sausages to Harry, who was so hungry he had ever tasted anything so wonderful, but he still couldn't take his eyes off the giant. (p.58-23)

e. 'We swore when we took him in we'd put a stop to that rubbish,' said Uncle Vernon, 'swore we'd stamp it out of him! …' (p.62-26)

(4 a) はゲームをしている場面で，主語である I が 50 点を Gryffindor から得る状況を示している。(4 b) は Aunt Petunia が Dudley を London に連れて行く状況を示し，(4 c) は Percy が一歩（a step）を相手（them）に対して向ける（踏み出す）様子を説明した文である。(2)と違い，前置詞句が目的語の所在を示しており，(4 a) は起点を，(4 b) (4 c) は行き先を示している。(4 e) は前置詞句の後ろに名詞句がなく，take in で「引き取る」という意味で使われている。

SVO 前置詞句には他に，動詞 take の熟語として辞書に掲載されているものがある。今回集めたデータには，take の項目ではなく，目的語の名詞の項目に掲載されているものがいくつか見られた。(4 d) は，辞書では eye の項目で，「take one's eyes off　～から目を離す」という熟語として掲載されている。他にも，mind の項目で「take one's mind off　～から目を離す」，year の項目で「take years off　若返らせる」などがあった。

4.1.2.4　SVO 副詞句

SVO 副詞句という構文パターンが 11 例見られた。本来，副詞は，be 動詞の後ろまたは一般動詞の前に置かれるものであるが，ここでは目的語句の後ろに置かれているものがあった。本データで集めた例文で，動詞 take と副詞の組み合わせが熟語として辞書に掲載されているものも多く見られた。この場合，副詞の意味は動詞 take の意味よりも目的語句の意味や文全体を修飾するようだ[6]。

(5)　SVO 副詞句

a．Professor McGonagall rolled up her scroll and took the Sorting Hat away. (p.134-62)

b．His aunt and uncle hadn't been able to think of anything else to do with him, but before they'd left, Uncle Vernon had taken Harry aside. (p.31-10)

c．Aunt Petunia took it curiously and read the first line. (p.43-15)

(5 a)(5 b)はそれぞれ，「take away　取り上げる，持ち去る」「take aside (内緒話などのために)人を脇へ呼ぶ」などと，辞書にも掲載されている。(5 c) は，副詞 curiously が文のどれかの語を修飾しているのではなく，Aunt Petunia が行う動作全体を修飾しているといえる。

4.1.2.5　SVO to V

S take O to V という構文パターンが 6 例見られた。どれも時間を表す目的語が取られ，不定詞句の内容を達成するために要する時間を表している。

---

[6] 副詞に関しては，文のどの位置にあるかによって，文全体を修飾したり，個々の単語のみを修飾したりする場合がある。本稿では言及しないが，動詞 take と結びつくことによって熟語的意味を持つものについては，これから検討しなくてはならないだろう。

(6) SVO to V

a. Yet again, Ronan took a while to answer. (p.274-125)

b. It took a minute or two to pass. (p.277-127)

(6a) は主語である Ronan が答えを言うまでしばらく時間がかかったこと，(6b) は通過するまでに1，2分かかったことを表している。(6b) については，主語が it となっており，行為者は先行文脈に明記されている。

4.1.2.6 SVO for 句 to V

(6)の構文パターンに for 句が挿入された S take O for 句 to V という構文パターンが2例見られた。これは，for 句が不定詞句の行為者で，その行為者が不定詞句の内容を達成するために時間を要することを表している。

(7) SVO for 句 to V

a. It took perhaps thirty seconds for Snape to realise that he was on fire.(p.207-99)

b. It took quite a while for them all to get off the platform. (p.330-158)

(7a) は Snape が火の上にいることを認識するまでに 30 秒はかかったであろうことを，(7b) は彼らすべて（“them all”は先行文脈にある all students を指す）が駅のプラットフォームに着くまでにしばらくの時間を要したことを表している。

4.1.3 SV

次に，SV という構文パターンについて分類する。この構文パターンで最も多かったのは SV（＝複合動詞句）（名詞句なし）で，6例見られた。今回の分析で，動詞 take に続くのはすべて副詞だった。副詞は頻度順に，over(3

例)，off（２例)，back（１例）であった。副詞の後に名詞句がない場合は，明記されてはいないが文脈の状況から推測出来る場合と，先行文脈に相当語句がある場合，また，動詞句が自動詞的な意味を持っている場合とがある。

⑻　SV（＝複合動詞句）（名詞句なし）

ａ．‘… Yeh’ve done yer bit, I’ll take over from here.’ (p.270-121)

ｂ．Ron looked taken back. (p.116-31)

ｃ．Harry jumped back on his Nimbus Two Thousand and took off. (p.244-110)

（８ａ）は，先行する文脈で役割を交代する話をしており，その役割を主語である「私（Ｉ）」が「take over　引き継ぐ」という意味で使われている。（８ｂ）は主語の Ron が「take　back　たじろぐ」様子を，（８ｃ）は主語である Harry が「take off　離陸する」ことをそれぞれ表している。

4.1.4　S be Vpp（受け身）

S be Vpp（受け身）については，15 例見られた。

⑼　S be Vpp

ａ．‘And the Quaffle is taken immediately by Angelina Johnson of Gryffindor - what an excellent Chaser that girl is, and rather attractive, too -’ (p.202-93)

ｂ．‘Miss, Granger, five points will be taken from Gryffindor for this,’ said Professor McGonagall. (p.194-87)

受け身表現については，本来 SVO の O であるものが主語として表されていると解釈でき，（９ａ)については主語である the Quaffle が by 句の Angelina Johnson of Gryffindor にとられた様子を，（９ｂ）は主語である five points

が from 句にある Gryffindor からとられた様子を，それぞれ表している。どちらも主語の所在が前置詞句によって明示されている。

4.2 文法役割について

以下の表は主語と目的語というそれぞれの文法役割に該当する名詞の種類について，示したものである。主語については，分詞や不定詞の場合には，推測される主語を補って数えた。

表 2 主語（S）の名詞句の種類と頻度

種類	数	割合(%)
人	126	78.3
物体	14	8.7
指示詞（it，that など）	12	7.4
出来事	4	2.5
時間	3	1.9
その他	2	1.2
計	161	100

表 3 目的語（O）の名詞句の種類と頻度

種類	数	割合(%)
物体	61	43.6
人	33	23.6
行為	23	16.4
指示詞	9	6.4
時間	7	5
場所	6	4.3
その他	1	0.7
計	140[7]	100

[7] 目的語に関しては，SVO と SV 複合動詞句（名詞句あり）の目的語のみの数となっている。

主語は人が最も多い。人の名詞は特に固有名詞が多く，話し言葉では I や you，his parents などなどの人称名詞も多く見られた。小説の主人公が男性であり，その他の登場人物も男性が多いからか，he や him といった表現が人称名詞では最も多かった。

目的語については，物体が最も多く，次に人が多い。辞書に記載されている動詞 take の基本的意味である「受け取る，取り出す，連れて行く」や，Norvig and Lakoff での take の基本的意味からすれば，当然といえば当然かもしれない。しかし，目的語句に場所をとることができるのは，人や物体と同様に説明できるのだろうか。動詞 take が目的語の位置に場所や行為をとる場合，たとえば「take the place」や「take one's place」などであるが，これらは熟語として扱われ，辞書の記載もそのようになっている。これに関しては，もう少しデータを集め，熟語としてではなく，take の意味拡張との関連で考察する必要がある。

4.3　主語と目的語の組み合わせについて

表 4 は，目的語を伴う構文パターン (140 例) に現れた主語と目的語の種類の組み合わせである。

表 4　主語（S）－目的語（O）の組み合わせと頻度

主語（S）－目的語（O）	数	割合（%）	主語（S）－目的語（O）	数	割合（%）
人－物体	55	39.3	物体－人	2	1.4
人－人	28	20.0	物体－行為	1	0.7
人－行為	20	14.4	物体－時間	1	0.7
人－指示詞	8	5.8	物体－場所	1	0.7
人－場所	5	3.6	物体－物体	3	2.1
人－時間	2	1.4	指示詞－時間	4	2.9
人－危険[8]	1	0.7	指示詞－人	2	1.4
行為－指示詞	1	0.7	指示詞－物体	1	0.7
関係－人	1	0.7	指示詞－行為	2	1.4
時間－物体	1	0.7	指示詞－場所	1	0.7
			計	140	100

Norvig and Lakoff で示されている 7 つの用法は，どれも主語が人で，目的語は物体，行為，人であった。しかし，今回の分析では，主語が人の場合，場所や心(感情)，時間なども目的語の例や，人以外に物体や指示詞が主語になる例があった。

ここでは 8 例であるが，物体が主語となり，行為や時間，場所などを目的語にとる用法が存在した。しかし，意味は擬人的であり，主語である物体が何らかの行為をしたという表現となっている。

⑽　The moment the lock had clicked open, the key took flight again, looking very battered now that it had been caught twice. (p.302-135)

⑽は鍵が鳥のように羽を持ち，飛んでいるという場面で，その鍵を使って扉

[8] この目的語（危険）は，表 3 では「その他」の項目に入れた語である。「危険」は抽象的であり，また，1 例しか見られず，分類が難しい。抽象概念をどのように分類するかについてはもっと検討する必要がある。

を開けると，その鍵が飛び去ったという文である。

指示詞が主語となる場合は，たとえば主語が It である場合は，「時間がかかる」といった意味で take が使われ，その際の指示詞は仮主語としての存在となっていた。It ではなく That の場合は，前の文脈の内容を指している事例があった。

(11) a．It took a minute or two to pass. (p.277-127)
　　b．'… That'll take a lot of explaining.' (p.267-33)

(11a) は，to 不定詞句の行為をするためにかかる時間を説明した文だが，It は行為者ではなく，実際の行為者はこの文に明示されていない。この文の前後の文脈を見ると，誰かが何かをするために時間を要したというよりも，経過した時間そのものを説明しているので，行為者が明示されていないようだ。(11b) は，指示詞は前の文脈で話している内容を指しており，その内容について多くの説明を要するということを意味している。

5　まとめと今後の課題

本稿は事例研究を通して動詞 take の結びつく構文パターンと，文法役割について述べてきた。実例を分析することで，Norvig and Lakoff で分析されている 7 つの用法の分類は take の結びつく構文パターン全てを扱ってはいないこと，7 つの用法の頻度に関して不明であることなど，用法の選択基準，分類基準が曖昧であることを指摘した。

Norvig and Lakoff と今回の分析の相違点を述べる。Norvig and Lakoff (1987) は SVO 前置詞句という構文パターンを取りあげて分析している。これは，今回の事例研究でも 2 番目に多い構文パターンであり，結びつく主語は人が多く，目的語は物体が多いというのも確認することができた。

しかし，今回の分析では，動詞 take は SVO という構文パターンを最も多

くとり，その後ろに前置詞句や副詞句が続くものや，take と目的語が結びついて熟語として機能しているものなども多く見られた。動詞 take が副詞と結びつき，複合動詞句となっている例も見られた。受け身や不定詞，分詞構文パターンなども多く見られた。Norvig and Lakoff では SVO について，こちらのほうが頻度が高いにも関わらず言及していない。また，SV 複合動詞句についても言及されていない。文法役割については，主語として人といった，目的語句を移動したり自らが移動したりするものが多いこと，目的語としては人や物体などの，移動可能なものを多くとることがわかった。

今回は統語面の分析を行ったので，意味について深く言及はしていない。また，take と目的語句が結びついて熟語になる場合の詳細な意味分析や一般化もしていない。構文パターンについては，たとえば受け身表現などは，受け身についての先行研究を言及することも必要になると考えられる。今後の課題として，構文パターン全体の意味と動詞 take の関係，軽動詞としての take，熟語の意味と動詞 take の関係などについて，さらにデータを集めて行う必要がある。

参考文献

Norvig, Peter, and George Lakoff. 1987. Taking: A study in Lexical Network Theory. *BLS* 13: 195–206

Thompson, Sandra A. and Paul J. Hopper. 2001. Transitivity, clause and argument structure: Evidence from conversation. In Bybee and Hopper. *Frequency and the emergence of linguistic structure*, 27–60. John Benjamins.

〈使用データ〉

Harry Potter and the Philosopher's Stone (J.K. Rowling, 1997), Bloomsbury

〈参考辞書〉

『コウビルド英英辞典　第 3 版』（2001）HarperCollins Publishers

『ジーニアス英和辞典　第 4 版』（2006）大修館書店

『ロングマン英和辞典　第 1 版』（2007）ピアソン・エデュケーション

『リーダーズ英和辞典　第 2 版』（1999）研究社